

大祓の儀式は宮中に於いてどの様に行われていたか、と申しますと、大宝元年（七〇一）の大宝立礼の神祓会に「凡そ六月、十二月晦日の大祓は東西（大和、河内）の文部祓刀を上り、祓詞を読む。百官男女を裁所に衆集し、中臣祓詞を宣り、卜部解除を為す」と記されていて、また延喜格（九〇七）にては、この時「御麻」「荒世、和世」「壺」等の「御贖」の儀式が行われ、その時、宜陽殿の南頭に於いて奏せられる宜命が大祓祝詞である、と言われています。

宮中に於ける先の儀式がどのようなものか、筆者現在その資料を持ち合わせていません。今はただ、先の文章の中の主な語句について分かっている事のみを次に記して御参考に供します。

律令——律令とは律と令。わが王朝時代に於ける法典。律は罪人を罰する法、令は細大の制度を規定したもの。

格——のり、おきて。規則。特に王朝時代律令を執行するため時勢に応じて発せられたもの。

荒世——六月祓の時、御贖物のために神祓官から奉るあらたえの衣。

和世——六月及び十二月のみそかに行われる宮廷の儀式に、天皇の身長を量る竹、または節折の贖物として奉る服、すなわち和妙の称。

あがもの——罪をあがなう料として祓の時に供えるもの。

節折——昔、宮中で六月・十二月のみそかに、荒節・和節の竹の杖をもって、天皇・皇后・皇太子の丈の寸法を量って行う祓。

荒妙——織目の粗い布。

和妙——織りの細かい袴（絹布類の総称）

さて唯今から大祓祝詞の現代語による説明に入りたいと思います。大祓祝詞は文章の一節々々を切らずに書いてありますので、何処までが一節なのか、意味が分かりませんと節の区切りもはっきりしません。そこで一節々々を前もって区切り、書いて行く事にいたします。

<sup>うごな</sup> 集侍はれる、<sup>みこ</sup> 親王、<sup>おほきみ</sup> 諸王、<sup>まえつきみ</sup> 諸臣、<sup>もものつかさびともろもろ</sup> 百官人達諸 聞召せと宣る。天皇  
<sup>みかど</sup> が朝廷に仕へ奉る、<sup>ひれかくる</sup> 比礼挂くる伴男、<sup>とものを</sup> 手櫛挂くる伴男、<sup>たすきか</sup> 鞆負ふ伴男、<sup>ゆき</sup>  
<sup>たちは</sup> 劔佩く伴男、<sup>つかさ</sup> 伴男の八十伴男を始めて、<sup>つかさ</sup> 官々に仕え奉る人達の、<sup>つがさ</sup> 過ち  
<sup>くさぐさ</sup> 犯しけむ雑々の罪を、<sup>みなつきつごもり</sup> 今年の六月晦の大祓に、<sup>もろもろ</sup> 祓ひ清め給ふ事を、  
 諸 聞召せと宣る。

以上が大祓祝詞の序文に当たります。この序文から解釈・説明を始めることとなりますが、ここでお断りして置かねばならない事があります。先月、大祓祝詞の話を始めようとしたら、会員のYさんが、現在の各神社で称えていらっしゃる「大祓詞」(神社本應蔵版)を筆者に持って来て下さいました。その文章を読みましたところ、上述の大祓祝詞の序文が全部削除されているのです。「大祓詞」の文章が大祓祝詞だと思っている方には、誠に奇妙と思われるでしょうから、この事についての事情をお話申し上げることにいたします。

本来、大祓祝詞は先にもお話いたしましたように、天津日嗣天皇が日本国家建設の方針、世界の将来に対する予見、並びに世界の人々の中に起るであろう罪穢の修祓の方法等を国民に教示した、天皇の国民に対する宣言であります。それ故、大祓祝詞を読む大中臣(総理大臣)は天皇の前で、天皇を背にして立ち、文武百官を前にして「天皇の宣言はこの様なものですよ」という様に読んだものであります。

それが現在では、神社神道や新興の宗派神道に於いては、神官が神の方を向いて、神に奏上する形式で祝詞を称えるようになりました。祝詞を称える人の向きが百八十度逆転しました。これは今より二千年以前、人類文明創造の原器であった言霊布斗麻邇の原理が隠されて以来、それに代わる神社神道が創設され、神道が礼拝の形式を外国伝来の儒教・仏教を真似た事から始まったためであります。日本の古神道では、神である言霊アオウエイの天の御柱を心中に齋く(五作る)事を目的として、神を拝む(おろがむ)事はありませんでした。言霊原理を神として、伊勢神宮の御祭神として祭って以来、神を対象とする新興の形式が始まったのであります。そのため、信仰の形式としては大祓祝詞の序文は全く適当ではありません。そこでスッパリと削除という事になったのでありましょう。

祝詞の文章の説明に入ります。「<sup>うごな</sup>集侍はれる、<sup>みこ</sup>親王、<sup>おほきみ</sup>諸王、<sup>まえつきみ</sup>諸臣、<sup>もものつかさびと</sup>百官人達諸聞召せと宣る。」集侍はれる、とは「此処に参集なられた」の意。親王とは、大宝令で、天皇の兄弟・姉妹及び皇子・皇女の称号。明治憲法では、皇子以下皇玄孫までの男子の称号。<sup>おほきみ</sup>諸王とは親王以外の皇族（九条家本延喜式）の意。<sup>ももつかさ</sup>百官とは大勢の官職にある人の意。文全体で「此処にお集まりになった親王初め皇族方、またお役人の方々、お聞きください」という事になります。

「<sup>すめら</sup>天皇が<sup>みかど</sup>朝廷に仕へ奉る、<sup>ひれかくる</sup>比礼挂くる<sup>とものを</sup>伴男、<sup>たすきか</sup>手襷挂くる<sup>ゆき</sup>伴男、<sup>たち</sup>鞆負ふ<sup>は</sup>伴男、<sup>つかさ</sup>劔佩く<sup>は</sup>伴男、<sup>は</sup>伴男の八十伴男を始めて、<sup>おほきみ</sup>官々に仕え奉る人達の、……」

この文章は、天皇が政治を知らしめず朝廷に、役人として務めている人々の四種類の役職について述べる所であります。その四種類とは第一に<sup>ひれかくる</sup>比礼挂くる、第二に<sup>たすきか</sup>手襷挂くる、第三に<sup>ゆき</sup>鞆負ふ、第四に<sup>は</sup>劔佩く、のそれぞれの伴男であります。文章を読んだだけでは、現代人には全く何の事だかお分かりにならないでしょうが、言霊学の立場で見ると明瞭に理解出来ます。それぞれを次に説明していきます。

今まで幾度となくお話して来た事ではありますが、人の心は五段階の次元宇宙を住家としています。五段階即ち五重の層を住家としますので、人間の住む所を<sup>いへ</sup>五重、つまり家と言う訳です。この世に生まれた赤ちゃんが付与されている人間性能はアオウエイの五母音の重畳で表わされます。この五母音の縦の並びが、天皇（スメラミコト）の人類文明創造の政（マツリゴト）の場合は<sup>いえ</sup>アイエオウ（天津太祝詞音図）と表わされます。天皇の知らしめず政庁の役職の仕組みも人間性能と同様五段階となっています。この五段階の役職の内容から見ますと比礼挂くる伴男以下の役職が理解されて来ます。

大祓祝詞の序文には天皇の政庁の役職として比礼挂くる伴男以下四伴男が書かれています。政庁の仕組みが五段階だ、と申しあげましたから、四伴男では一段が欠けることになります。その一段とは何か、と申しますと、そこが天皇御自身のいらっしゃる政（マツリゴト）の座という事となります。政庁の役職の言霊的順序は天津太祝詞音図のアイエオウの縦の並びで表わされます。この五母音の並びに従って天

皇と四伴男との仕組みを上より並べますと、天皇（ア）、比礼挂くる伴男（イ）、手襁挂くる伴男（エ）、靱負ふ伴男（オ）、劔佩く伴男（ウ）となります。五段階の役職の内容について次に説明して行きます。

### 天皇（スメラミコト）言霊ア

大祓祝詞に示される日本朝廷の政治の実際の様子を述べましたが、古事記神代の巻の伊耶那岐の大神の「禊祓」であります。その「身禊」の章の冒頭の文章を引用しますと、「**ここを以ちて伊耶那岐の大神の詔りたまひしく、**『**吾はいな醜め醜めき穢<sup>しこ</sup>き<sup>きたな</sup>国に到りてありけり。**かれ吾は御身の<sup>おほみま</sup>襪<sup>はらへ</sup>せむ』とのりたまひて、**笠紫の橋<sup>つくし</sup>の<sup>たちばな</sup>小門の阿波岐原<sup>をど</sup>に到りまして、<sup>あわぎ</sup>襪<sup>はら</sup>ぎ襪へたまひき。」とあります。この文章の伊耶那岐の大神とは、単に生命意志の主体である伊耶那岐の神ではなく、主体である伊耶那岐の神と客体である伊耶那美の神とが一体となった宇宙身・世界身としての伊耶那岐の大神である、と申し上げました。また文章の中の「御身」とは、単に伊耶那岐の大神の精神的身体<sup>おほみま</sup>というのではなく、伊耶那岐の神の領域である黄泉国<sup>よもつ</sup>即ち外国で生産される種々の精神的産物を見聞し、経験してしまった伊耶那岐の神の身体という意味でありました。禊祓とは単に伊耶那岐の大神自身の祓いというのではなく、伊耶那岐の大神の心を心とし、外国産の文化の経験をわが身体としての禊祓でありました。それは言霊布斗麻邇の原理に則る人類文明創造の行為であります。**

大祓祝詞にあります天皇の政庁に於ける地位は先の古事記の禊祓の文章によって明らかに示されます。「御身の<sup>おほみま</sup>襪ひせん」とは、あたかも母親が赤ちゃんを抱き、自らの身体と同様に育むように、外国文化を摂取し、育てることです。大祓祝詞に於ける天皇は国民という子を抱く母親の如き慈愛を以って見そなわします。これを天皇の大御心と言います。即ち朝廷の五段階アイエオウの次元機構の中の言霊アが天皇の地位であります。言霊アの天皇の下に、イエオウの四次元の役職が置かれるのであります。

### ひれかくる とものを 比礼挂くる伴男、言霊イ

比礼とは<sup>ひれ</sup>霊頭とも書きます。霊である言霊が眼で見えて顕れるようにしたもの、の意で、神代文字、麻<sup>ま</sup>瀨<sup>に</sup>名<sup>な</sup>の事です。「挂く」とは掲げるの意。「比礼挂くる」とは五十音言霊図、または言霊原理によって世間の生産物、文化を検討するの意となります。世界の文化といたしましても、ウオアエの四段階の別があります。言霊ウに属する人間性能より産出される現象の構造・時所位は天津金木音図に参照してその実相が調べられます。以下、言霊オの文化には赤珠音図が、言霊アに属する文化には宝音図が、そして言霊エの文化現象には天津太祝詞音図が適用され、検討が行われます。比礼挂くる伴男とは以上の如く、政治の鏡である五十音言霊図を掲げ、この鏡に則り諸文化現象を検討し、その実相を見定める役職の事であります。

### たすきか 手襷挂くる伴男、言霊エ

手襷とはまた手次とも書き、古代手の指を次々に折ったり、伸ばしたりして数を数えることであります。伊勢五十鈴宮は五十音言霊をお祭りする宮であり、奈良の石上<sup>いそのかみ</sup>（五十神）神宮は五十の言霊を操作・活用する五十の手法を奉る宮であります。その石上神宮に昔から伝わる「一二三四五六七八九十と数えて、これに玉を結べ」という言葉があります。五十音の言霊の動きを数で示す時、この数を<sup>かずたま</sup>数霊と呼びます。この数による動き方を手の指の動きで示しますことを<sup>たすき</sup>手襷（手次）と言ったのでした。でありますから、比礼挂くる伴男が、各地で生産されて来る諸文化を、五十音図に照らしてその実相を明らかにしたものを、次にどの様に摂取し、社会一般の福祉にどうしたら役立たせることが出来るか、の言霊原理の活用によって、即ち手の指を折り伸ばしすることによって見定め、決定する役職が手襷挂くる伴男であります。即ち言霊エの実践智の仕事です。

### ゆき 鞆負ふ伴男、言霊オ

鞆とは矢を入れて背負う道具です。矢は人に向って飛んで行くもので、人の言葉の言葉、言霊に譬えられます。比礼挂くる伴男、手襷挂くる伴男によって、言霊原理に基づいて国民に発布される命令が決定されますと、それをそのまま言霊理論としてではなく、国民に理解さ

れ易い比喻・表徴または種々の概念的な言葉による法律・法則として国民に伝える役職のことです。これは言霊オの働きです。

### 劔佩く伴男、言霊ウ

劔負ふ伴男の劔が実際の矢の容物ではなく言葉の表徴であったように、この劔も武器としての太刀ではなく、霊的な判断力である霊劔または節刀の意味であります。劔負ふ伴男によって宣布された社会の法律・法則を人間社会の中で国民に接することによって現実に執行する役職の事です。国の中の集団または御仁に法律を執行する場合、それぞれ事情が異なり、同じ状況のものなど何一つありません。それら対応する執行者のその時、その場の適切な判断が不可欠です。劔とはその場の判断力の事を指す言葉であります。法律が一般社会に直接に触れる場での仕事でありますから、言霊ウの役職と言われます。

太古の天皇の知らしめす朝廷の政治機構を表わす天津太祝詞音図の五母音、アイエオウにおいて、最上段のアを天津日嗣天皇の座とした時の、天皇の下に従う比礼挂くる伴男、手襷挂くる伴男、劔負ふ伴男、劔佩く伴男の四伴男の役職の内容は以下の如くであります。この四伴男の役職の内容を頭に入れて置いて頂いて、大祓祝詞を読んで行きますと、最後に出て参ります「祓戸四柱の神」と同様の内容を持ち、しかも古代の政治がいかに国民大衆の気質にぴったり適合していたか、がお分かり頂けることとなりましょう。次の文章の解釈に移ります。

「**官々に仕え奉る人達の、過ち犯しけむ雑々の罪を、今年の六月晦の大祓に、祓ひ清め給ふ事を、諸聞召せと宜る。**」

この文章は単に何気なく読みますと、それだけで分かったように思われます。これより前の文章から続いて「天皇を始め、四伴男やその他の役人達の、過ちを犯した事から作るいろいろな罪を、今年の六月末日の大祓の儀式に於いて、祓ひ清めるから、その事について皆さんお聞きなさい」という意味に受取れるでありましょう。

けれど大祓祝詞の序文を、現代人が常識に従って先の如く受取ってしましますと、古代から数千年続いて来ました大祓の本来の意味は全くお分かりにならないで終わることになります。それはどういう事なのか、と申しますと、文章の中に出て来る「罪」に関する解釈に問題

があります。現在単に「罪」といえば、人を殺したり、物を盗んだり、だましたりする事と思います。大祓に後章出て来る天津罪、国津罪の中の国津罪と呼ばれる罪には現代同様、そういう罪も勿論含まれます。しかし大祓が本来その祓いの主たる対象とする天津罪と呼ばれる罪にはそのようなものではないのであります。ではどんな罪なのか、次に説明いたします。

太古に於いて、官職にある人も人間でありますから、いろいろな罪を作ることもあったであります。他人に不快な思いをさせたり、喧嘩をして人を傷付けたり、詐欺・横領の罪などもあった事でしょう。けれど官人としてもっと大きな罪は職務上の罪であります。太古より日本の朝廷の政治の最重要事は世界または日本の文明の創造の中枢機関としての仕事であります。世界あるいは日本の各地に於いて産出・発明されてくる思想・信条・主張・主義・陳情・訴訟等を受け付け、それらの事柄の事情を十分に生かし、歴史創造上の材料として吸収・消化することが出来たか、どうか、が最も重大な事であります。この作業が十中九まで達成されても、残された十分の一の積み残しは政治の禍根となり、世情不安の元となります。政治にたずさわる人にとって、この事がもっとも留意すべきことでありましょう。大祓の儀式の主な目的はこの罪の払拭にあったのであります。これらの罪穢の詳細は後章述べられる事となります。

以上で大祓祝詞の序文の説明を終わり、大祓の本論に入って参ります。

高<sup>かむつぎ</sup>天原に神留<sup>すめらあかむつかむるぎかむるみ</sup>ります。皇親神漏岐神漏美の命以ちて、八百万の神等<sup>つど</sup>を神集へ賜ひ、神議<sup>はか</sup>りに議りたまひて、我皇御孫命<sup>あがすめみまのみこと</sup>は、豊葦原の水穂<sup>とよあしはら みずほ</sup>国を、安国と平けく知らしめせと事依<sup>やすくに</sup>し奉りき。斯く依<sup>し</sup>し奉りし国中に、荒ぶる神をば、神問<sup>ことよさ</sup>はし賜ひ、神拂<sup>まつ</sup>ひに拂ひ賜ひて、言問<sup>よさ</sup>ひし磐根樹<sup>くぬち</sup>根立<sup>はら</sup>、草の片葉<sup>こと</sup>をも言止<sup>いわねき</sup>めて、天の磐座<sup>ねたち</sup>放ち、天の八重雲<sup>かきは</sup>を嚴<sup>いはくら</sup>の千別<sup>いづ</sup>きに千別<sup>あまくだ</sup>きて、天降<sup>あまくだ</sup>し依<sup>あまくだ</sup>し奉りき。

大祓祝詞の話始めるに当たり、序文の次に、祝詞の全体を五つの節に区切りました。先の文章がその第一節の天孫降臨によって日本国家の建設をはじめた折の国土の歴史的状況を述べた箇所であります。

文章を区切って説明していきます。

「高天原に<sup>かむつき</sup>神留<sup>すめらがむつ</sup>まります。皇親神漏岐神漏美<sup>かむるぎかむるみ</sup>の命以ちて」

神話の文章通りに訳しますと、「高天原神界にいらっしゃる、天皇の大元の創造親神、神漏岐・神漏美の神の命令によって、…」となります。この高天原を地球上の地理の問題にしますと、多分印度ヒマラヤ、チベット、その他アフガニスタン、パキスタン等の高原地帯が考えられます。また高天原を言霊学によって形而上の精神領域といたしますと、頭脳の中枢にあつて、<sup>あな</sup>天名十七言霊によって構成されている心の先天構造のこととも解釈できます。大祓祝詞の作者はこれ等形而上、形而下の内容を双方組み合わせた意味に使ったと推察されます。その推察の理由は解説が進むにつれて御理解頂けると思います。

神漏岐・神漏美の神漏<sup>かむるぎ</sup>ろは神室<sup>かむるみ</sup>即ち神の家<sup>かむる</sup>の意です。家は五重<sup>かむる</sup>で五階層の重疊を意味し、神漏岐は言霊アオウエイの主体を表わす五母音を、神漏美は言霊ワヲウエキの客体を表わす五半母音を指示しています。そして縦に並ぶ五つの母音はその中の言霊イが他のアオウエ四母音を統轄しておりますので、神漏岐は言霊イである伊耶那岐の神に当ります。同様に神漏美は言霊キである伊耶那美に当ります。伊耶那岐の神（伊耶那美の神）は言霊並びに言霊原理の神でもあります。

そこで「高天原に神留まります。皇親神漏岐神漏美の命以ちて」とは「太古に於いて、アジアの高原地帯に大勢の聖（霊知り）達が集まり、人間の心の先天構造はどの様な働きをしているか、研究を進め、終に人間の精神構造を形成する言霊布斗麻邇の原理を発見・完成させました。そしてその原理の自覚者の命令によって…」という意味である事が分かります。

「八百万の神等を神集<sup>つど</sup>へ賜ひ、神議<sup>はか</sup>りに議りたまひて」

日本の神道では神様の数をよく八百万と表わします。辞書では極めて多い数のこと、とあります。言霊学では心を構成する言霊数五十、その典型的な運用・整理法五十、計百の原理といたします。しかし五十の言霊の幾つかを五十通りの組み合わせ方で物事の現象を表現しますと、八百万どころか、無数の真実が現われて来ます。そこで八百万の神と申します。かくて「八百万の神等を神集へに集へ賜ひ、……」と



は、言霊原理の自覚者（神漏岐神漏美）の命令で、言霊原理の諸法則のすべてを含めて検討した結果として」の意となります。

「<sup>あがすめみまのみこと</sup>我皇御孫命は、<sup>とよあしはら</sup>豊葦原の<sup>みづほ</sup>水穂国を、<sup>やすくに</sup>安国と<sup>しら</sup>平けく<sup>ことよき</sup>知しめせと事依し  
まつ  
奉りき」

皇孫命を<sup>ににぎ</sup>邇々芸の命と呼びます。皇孫と邇々芸とは同様の意味だと申しますと、不審に思われる方もいらっしゃる事でしょう。神道で皇祖というと天照大神の事です。その子は天の忍穂耳の命、そのまた子が邇々芸の命となり、邇々芸命は天照大神の孫に当ります。<sup>おや</sup>祖から見て孫は第三次的な生命です。邇々芸とは「二の二の芸術」という事で、これも第三次的な<sup>わざ</sup>芸の意です。言霊原理の運用である言霊エの神は天照大神です。その原理の第二次的産物は言霊即ち言葉がそのまま物事の実相を表わす大和言葉です。次にその大和言葉の実相そのままの人間社会を作る政治活動は第三次的な芸術という事になります。言霊原理から数えて、原理に則る文明社会建設の政治は第三次的な芸術という事が出来ましょう。皇孫邇々芸命とは、その第三次的である言霊原理がそのまま社会の実相として表われた社会・国家の建設者の名なのであります。

「豊葦原の水穂の国」の事を従来の国語学は「豊かに葦が繁り、稲<sup>みづほ</sup>の瑞穂が実る国」即ちこの日本国と解釈します。しかし初めからその様に解釈したのでは、日本の国を肇めた意義は全く理解されません。日本の国家を肇め、文明を創造して行くには、肇国・建設のための大前提があるのです。その前提となる言霊布斗麻邇の原理を実現する芸術作品としての国家の建設が日本肇国の精神なのです。その意味はこの国家の創始者である邇々芸命の名にも示されます。そして豊葦原の水穂の国とはその大前提となる目的の形而上的な内容を示した言葉なのであります。

豊葦原の<sup>とよ</sup>豊の字は太古の人名や土地名に多く見られます。豊とは十四の事で十四個の言霊アイエオウ・ワ・チキミヒリニイシを指します。この十四個言霊は人の心の先天構造を構成する十七言霊の中の代表言霊十四個の意味です。また東洋史思考構造を表わす $\boxtimes$  数霊八を示す図形、と西洋的思考構造を表わす $\boxtimes$  数霊六を示す図形、その双方を統

轄することが出来る世界で唯一の思考原理を持つ国家である事を示すために  $8 + 6 = 14$  の数霊を表わす言葉でもあるのです。

豊葦原の葦原とは、その世界唯一のトヨの原理の言霊図上の説明であります（図参照）。大祓を行う朝廷の政治の原則を示す天津太祝詞五十音言霊図を右に掲げました。古代の日本の政治は、この音図に於けるア段（天皇の大慈悲の大御心）とイ段（言霊原理）を政治の方針の中核として成立します。その事を示すために音図の中の言霊アと言霊シを結んで名と致します。そこで建国の大方針が豊葦原と示されます。原とは図示された場という事です。

天津太祝詞音図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ	シ	イ	ニ	リ	ヒ	ミ	キ	チ	イ
エ									エ
ヲ									オ
ウ									ウ

水穂国みづほのこくの水穂とは陰陽（水火）と解釈出来ます。原理方針（隠）と出来上がった社会形態（陽）とが完全に一致している、事を示します。国くにとは組くんで似にせるの意、または区く切って似にせるの意でもあります。一般なるものを、言葉に組み、または区切って、特殊なものと限定した事を意味します。日本国と言えれば他の国とは区別した日本国家の意であります。また水穂は瑞穂みづほと書く場合があります。言霊図の中のそれぞれの言霊（イねの音）が瑞々しく実り、生き生きと生気が満ちている国とも解釈出来ます。

以上の意味を踏まえますと、「豊葦原の水穂国を、安国と平けく知らしめて知らしめせと事依し奉りき。」とは「精神の先天構造の法則に基づいて言霊の生氣漲る国となるにふさわしい処へ降りて行って、その土地を平和に治めなさい、と皇孫邇々芸命に委任なさいました」と解釈することが出来ます。

以上の邇々芸命の天孫降臨の事を古事記は次の様に伝えています。

「天照大御神……この豊葦原の水穂なんじの国は、汝の知らさむ国なりとことよさしたまふ。かれ命のまにまに天降りますべし。」また「ここは齋肉あまもの韓国そじしを笠沙から之前かさのみさきに求まぎ通まりて詔こりたまはく、此地ここは朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり、かれ此地いよぞ甚と吉いよき地と詔りたまひて、底津石根に宮柱太しり、高天原に氷木高しりてましましき。」

かく古事記が伝えますように、世界の屋根といわれるヒマラヤ、アフガニスタン、チベット等の高原地帯から、人間精神の究極原理を自覚・保持した霊知りの集団が、その原理に基づいた精神文明豊かな国

家の建設を目指して、この日本列島に天降って来たのであります。(現在の古事記の神話は「齋肉の韓国を笠沙之前に求ぎ通りて……」の箇所を書き替えております。ご注意下さい。)